

インタラクティブ空間演習 (女子美術大学大学院)

## 「イーミック」と「エティック」の視点

3章 「1. 記号と意味作用」 pp.78-88  
(2017-11-8)

池上嘉彦 著「III. 創る意味と創られる意味— 意味作用をめぐる—」、『記号論への招待』

担当： 石井 拓洋  
takuyo.ishii@gmail.com

2017

## 【復習】 「分節」と「差異」作用 p.76

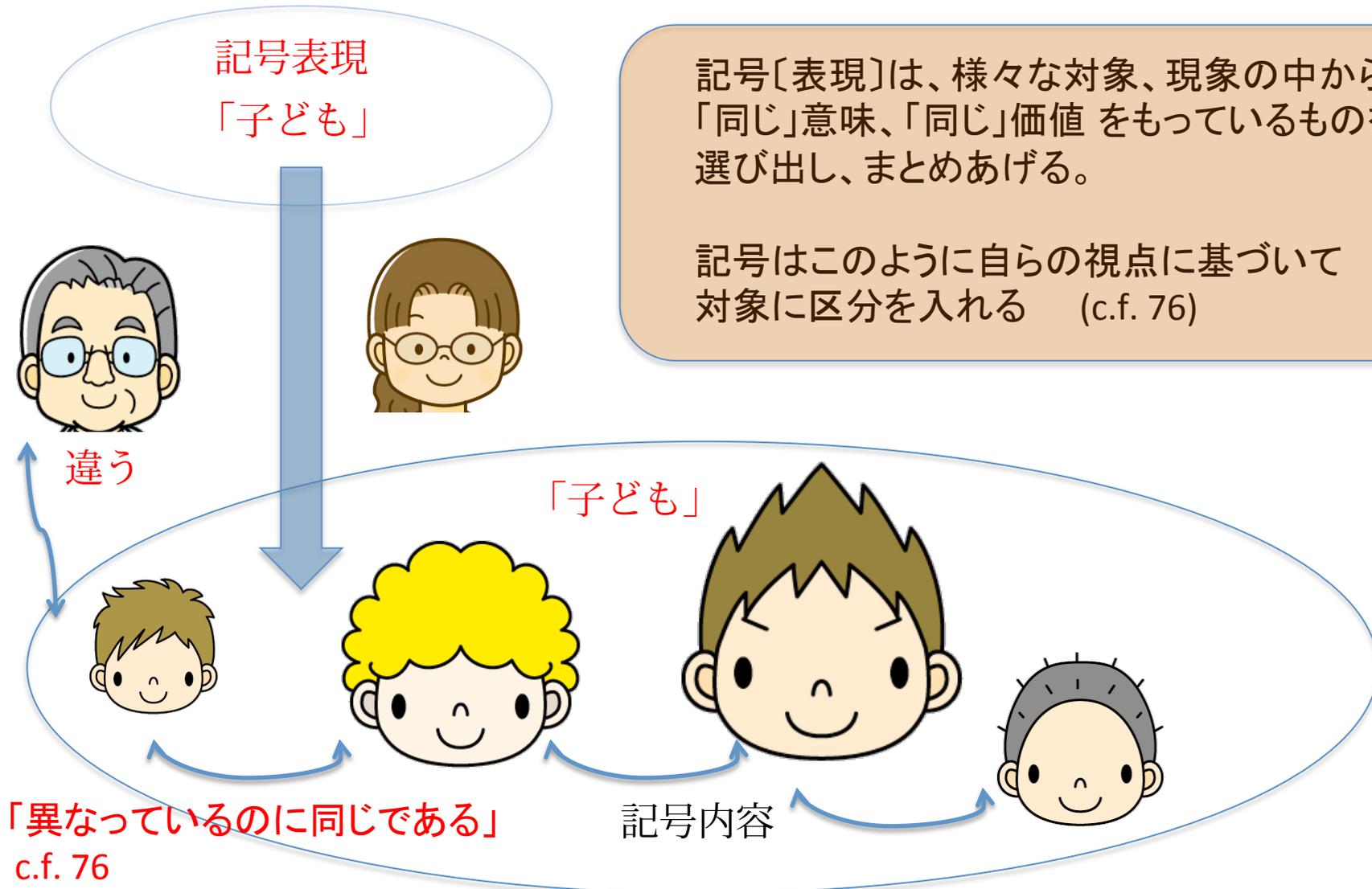
「記号の持っている本質的な働きの一つ」



「『意味づけする』、『価値づける』、という機能」

(池上、p.76)

# 【復習】「分節」と「差異」作用 p.76

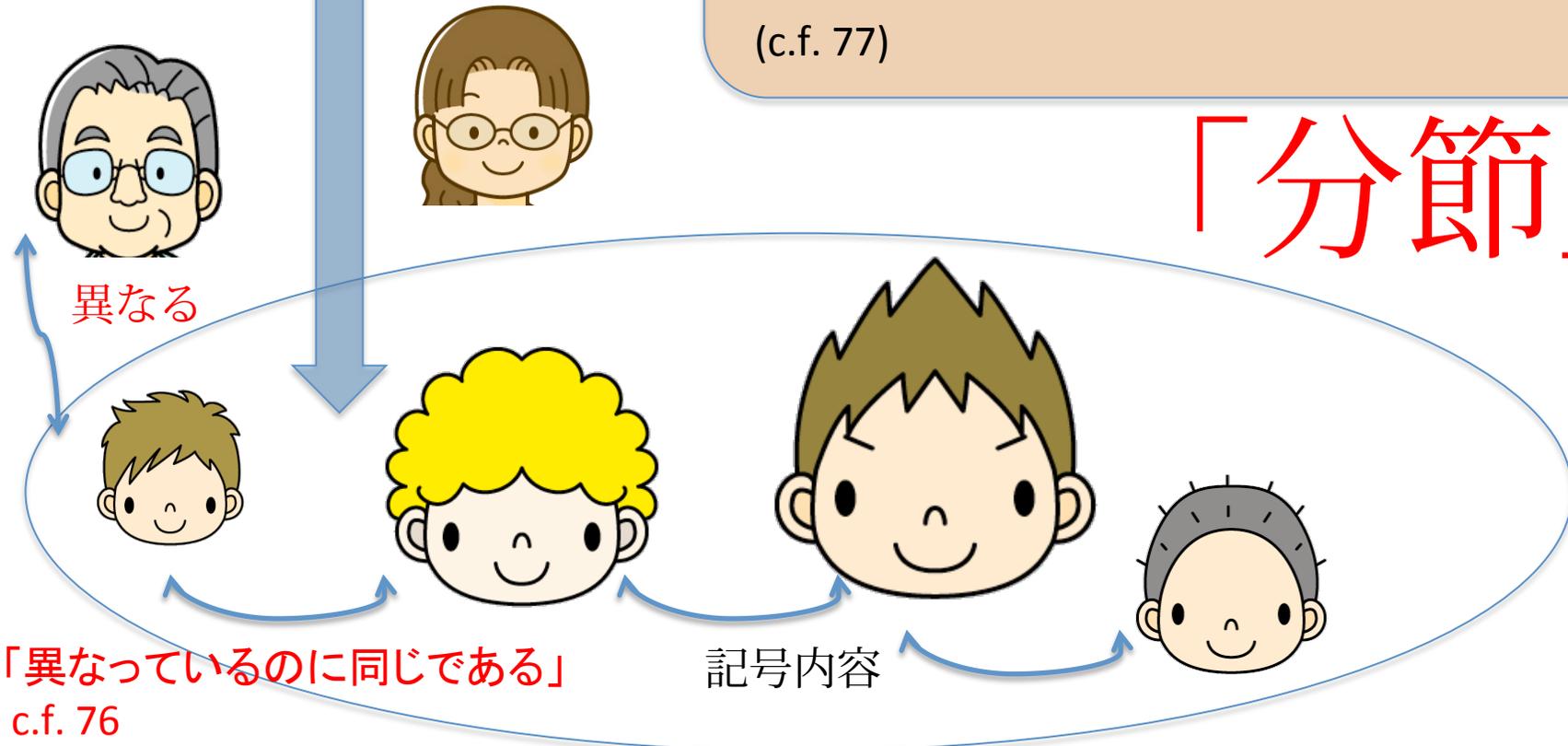


# 【復習】「分節」と「差異」作用 p.76

記号表現  
「子ども」

記号の「分節」という働きは、  
「同じ」価値としての 等質性を強調すると共に、  
「異なる」価値としての 差異性を強調する  
(c.f. 77)

## 「分節」



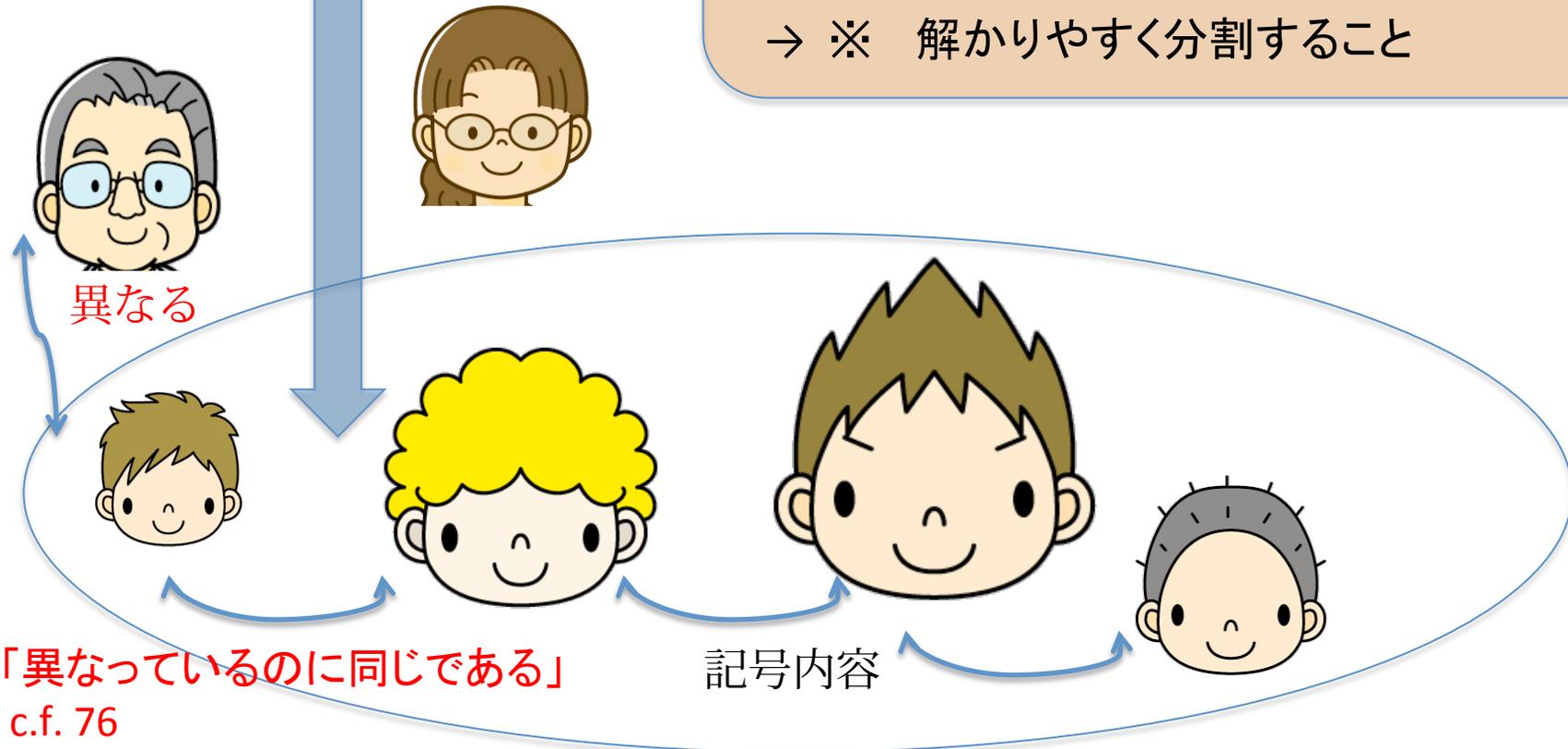
# 【復習】「分節」と「差異」作用 p.76

記号表現  
「子ども」

「分節」= articulation

n. 明瞭な発音 (すること)

→ ※ 解かりやすく分割すること



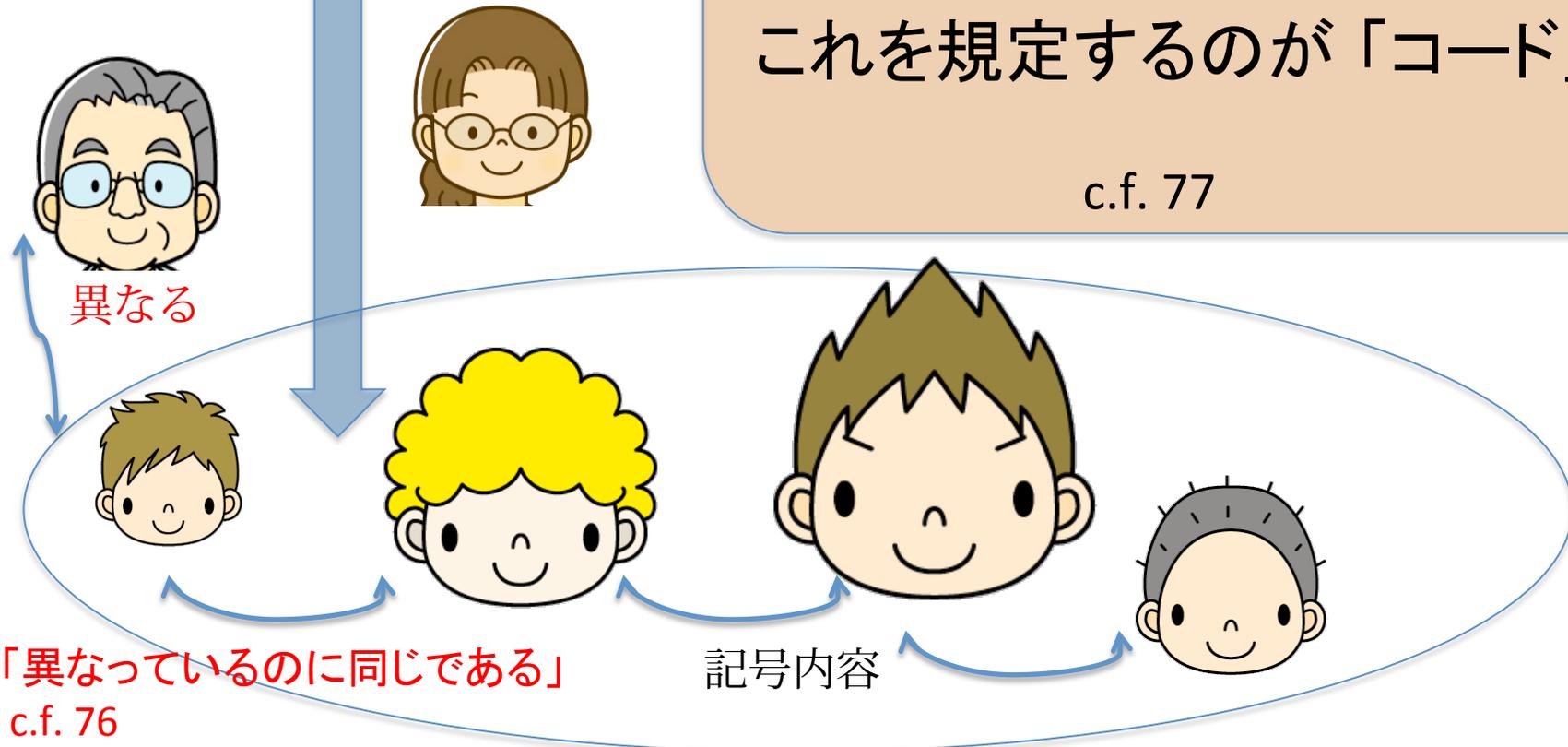
# 【復習】「分節」と「動機づけ」 p.77

記号表現  
「子ども」

何が「同じ」で、何が「違う」か。  
対象界をいかに「分節」するか。

これを規定するのが「コード」

c.f. 77



「異なっているのに同じである」  
c.f. 76

記号内容

異なる

「イーミック」 emic

「エティック」 etic

視点としての

- 各文化間における、物事に対する〈認識の差異〉を考察するための視点
- 本来は「言語学」の用語
- 米国の言語学者 K・L・パイク (Kenneth Lee Pike, 1912-2000) が提唱
- この用語は「文化人類学」分野でも応用的に取り入れられている

## 「イーミック」 emic な視点とは？

- 記号現象に対して、その差異を「コード」にもとづいて判断する視点
- 研究対象とする文化のメンバーとしての視点 (native viewpoint)
- 判断の結果から生まれる物事の「違い」や「同じ」に、価値判断が伴う。

## 「エティック」 etic な視点とは？

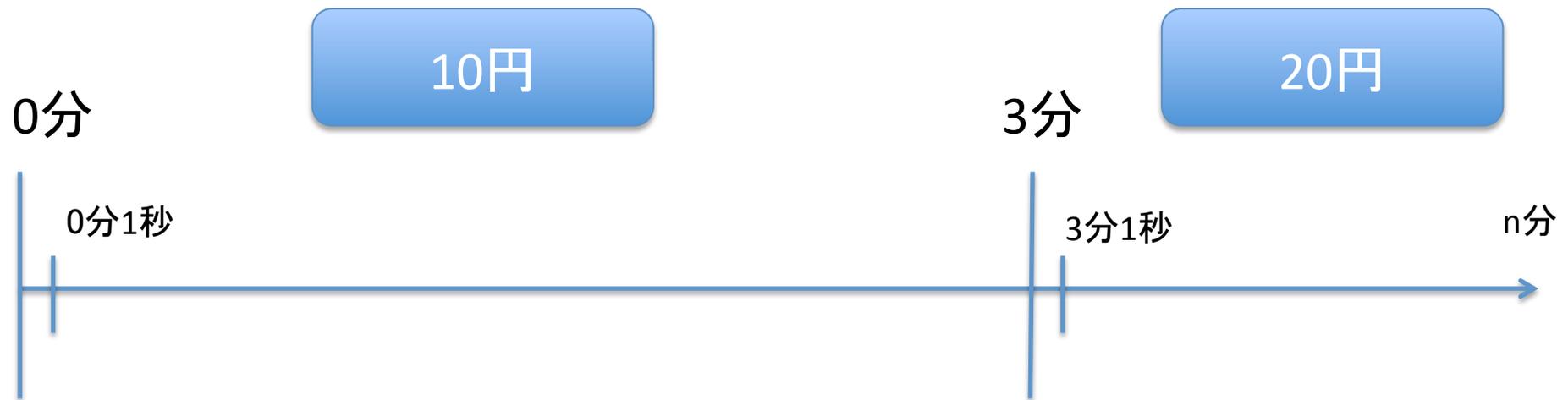
- 記号現象に対して、その差異を「コード」から離れて判断する分析的な視点
  - 「コード」にとらわれない 科学者による客観的視点（ちがうものはちがう）
- 判断の結果から生まれる物事の「違い」や「同じ」に、価値判断は伴わない

「イーミック」 emic = コードを参照する  
「エティック」 etic = コードを参照しない

※ 他の文化での慣習に対して 他者性 (違和感) を感じるとき、それを、コードを参照する「イーミック」な視点をもって、その文化内部のメンバーからの視点で考察すると、その慣習の価値について、より深く理解することができる。

また、あえてコードを参照せず「エティック」な視点をもって、その文化のメンバーの外側からの視点で考察すると、その慣習の在り方について、より客観的・科学的に認識することができる。

通話料金は3分まで10円。3分1秒以降 n分までは 20円 です ( = 規則、コード) 。



【 通話時間「1秒間」と「3分間」の違いを考える時 】

- = 規則上では、 価値としての通話料金が同じ = 「イーミック」的に同じ
- = 物理的にみて、 時間の量が随分違う = 「エティック」的に違う

【 通話時間「3分間」と「3分1秒」の違いを考える時 】

- = 規則上では、 価値としての通話料金が違う = 「イーミック」的に違う
- = 物理的にみて、 時間の量が (ほぼ) 同じ = 「エティック」的に同じ

## 〈兄弟〉の概念 ～ 日本語文化編

- 日本語では 〈兄弟〉の概念は「コード」によって区別される。
- 「アニ」と「オトウト」として、価値判断をもって、区別される。
- 日本のコードをふまえる「イーミックな視点」で見れば、両者は、価値的に「異なる」
- 日本のコードをふまえない、「エティックな視点」で見れば、両者は、個別の人間として、生物学的・客観的に「異なる」



「イーミック」的に  
異なる

「エティック」的に  
異なる



「イーミック」 emic = コードを参照する  
「エティック」 etic = コードを参照しない

※ 両者は、〈二値〉的に排他的ではない。

(決して、「イーミック」的に「同じ」ならば、つねに、「エミック」的に「違う」というものではない)

- ・ 「イーミック」的に「同じ」であり、かつ、「エミック」的に「同じ」 (共に「同じ」)
- ・ 「イーミック」的に「違う」であり、かつ、「エミック」的に「違う」 (共に「違う」)
- ・ 「イーミック」的に「同じ」だが、一方、「エミック」的に「違う」 もある
- ・ 「イーミック」的に「違う」だが、一方、「エミック」的に「同じ」 もある

## 〈兄弟〉の概念 ~ 英語文化編

- 英語文化では〈兄弟〉の概念は「コード」によって区別されない。
- 英語のコードを尊重するならば“ Brother “として、価値判断として「同じ」
- しかし、生物学的には両者は「異なる」
- 「イーミックな視点」で〈兄弟〉は、価値として「同一」
- 「エティックな視点」で〈兄弟〉は、生物学的に「異なる」



「イーミック」的に  
同じ

「エティック」的に  
違う



## 本来の「イーミック」と「エティック」

- もともとは言語学分野の「音韻論」と、言語学以外の「音声学」に由来
- phonemic (音韻論的・イーミック的)、 phonetic (音声学的・エティック的)
- 両者は「言語音をどのように捉えるか」が異なる
- 【音韻論】の視点 = 「イーミック」的 emic  
言語音を、**意味作用の区別に関与するか否かを扱う。**  
その基本単位としての「音素」を定める
- 【音声論】の視点 = 「エティック」的 etic  
言語音を**生理学的・音響学的に扱う。**

## 音韻論の視点 (イーミックな視点・コード参照)

- 問題となる言語で「同じ言語音」としての価値の規定に関心をもつ
- 「銀河」 = 「が」は、「破裂音の /g/」でも「鼻音の /ŋ/」でも「銀河」の語として同一
- しかし、「が」を「ざ」と発音すると、「銀河」ではなく「銀座」となる。
- したがって「銀河」の認識において、/g/と/ŋ/は同じ。/z/は異なる。
- 「銀河」を「ぎ」「ん」「が」とするように、音韻論では言語音を分解する。分解した言語音を「音素」という。

## 音声学の視点 (エティックな視点 = 科学的視点)

- 言語音をひたすらに科学的・客観的に判断する。
- 例): 「銀河」が実際に発音される場合、  
音声学的に見れば、厳密には同じ発音は2度とない。全て異なる。
- 音色、声の大きさ・高さ、発音の早さ、など発音は多様に変化する。
- 問題となる2つの事柄について、両者が、同じでも、異なっても、  
価値の判断には関心がない。

# 音韻論の視点

(イーミックな視点)

- ・ 音韻論の視点は、各国語の在り方(コード)をふまえて、語の発音の変動・変種の背後にある恒常的なもの・「不変的なもの」を読み取ろうとする視点(イーミックな視点)。

※ 「恒常的なもの」・「不変的なもの」 = 「構造」

## 「記号表現」 (シニフィアン) に求められること

- 多様な意味の伝達を可能とするために 「多数の記号」 が必要

[ But ] 「多数の記号」 では記号同士が類似するために明確な区別が困難

↑ (矛盾) ↓

- 明確で効率的な伝達のために、記号は 〈単純〉 で 〈少量〉 である必要がある

[ But ] 〈単純〉 で 〈少量〉 な記号では 多様な意味の伝達は困難

## 「二重分節」 ～ 〈単純で少量の要素〉が〈多数の記号〉を生む仕組み

- ・ 〈単純で少量の要素〉 = 単純で少量の「言語音」 (= 音素)

「世界中どの言語をとってみても、そこで用いられる言語音の数は、いくら多くても数十を超えることはない」(日本語は約50音)

- ・ 〈多数の記号〉 = 「言語音」 (=音素) の組み合わせによって多数の記号を作る

/ら/く/だ/ (3つの単純な音素で)

→ 「らくだ」, 「百済(くだら)」, 「墮落(だらく)」

※ アナグラム

# 「二重分節」 ～ 〈単純で少量の要素〉が〈多数の記号〉を生む仕組み

(文章) 「赤い子馬は走る」



(第一分節) 「赤い」「子馬」「は」「走る」



(第二分節) /あ/か/い/ , /こ/う/ま/ , /は/ , /は/し/る/

## 「二重分節」 ～ 〈単純で少量の要素〉が〈多数の記号〉を生む仕組み

(文章) 「 . . . — — — . . . 」 ( 「SOS」 のモールス信号)



(第一分節) 「 . . . 」 「 — — — 」 「 . . . 」 ( 「S」 「O」 「S」 )



(第二分節) / . / . / . / , / — / — / — / , / . / . / . /

## 「二重分節」 ～ 〈単純で少量の要素〉が〈多数の記号〉を生む仕組み

- ・ 言語のような「記号」は、一般に、より小さな「記号素」に分節できる。

※ 視覚的記号などは、この限りではない。

以上